
恋うた

城市佳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋つた

【著者名】

城市佳

【ISBN】

N5275D

【あらすじ】

福祉系の大学生である「僕」は、学生ボランティアの愛ちゃんに慕われている。10歳児ぐらいの知能しかない愛ちゃんを僕は妹のようにしか思っていない・・はずだ。でも愛ちゃんは僕に特別な感情を抱いているようだ。

「ひまわり作業所」で働く愛ちゃんは、長い髪を毎日きちんと一つに結んで、蝶とか花とかの可愛い髪留めをつけている。

養護学校の高等部を卒業してから親元を離れ、グループホームで暮らし始めて、

そろそろ一年が経つらしい。

この夏が終わったら20歳になるのだという。

作業所では朝早くからパンを焼き、

昼間は作業所に隣接している喫茶「ひまわり」でウェイトレスをやっている。

無邪気な笑顔が可愛い女の子だ。

福祉系の大学生である僕は、

学生ボランティアとして作業所に通っていた。

作業所で働く人たちは、僕たちボランティアを気持ちよく歓迎してくれる。

それは愛ちゃんも同じだった。

作業所にも、グループホームにも同世代の友達はいないようだったから、

僕たちと接するのが、楽しいのだろう。

愛ちゃんと同じ年の僕は、

でも先輩のような兄のような先生のような気持ち、どっちにしても上から目線で見ていたと思う。

愛ちゃんは10歳ぐらいの知的能力しかなかったからだ。

愛ちゃんの僕に対する態度が、他のボランティアに対するそれとはなんとなく違う事に気付いたのは、通い始めて二週間ほどした頃だ

つた。

愛ちゃんは日常生活にまだほど不自由はない。
計算も出来るし簡単な文章の読み書きも出来るから、
作業所やお店の仕事もスムーズにこなした。
何よりもその人懐っこい性格で、お密さんには人気者だった。

とはいって帳簿をつけたりは出来ないし、少し難しい計算や
(大勢で来たお客様さんが、ひとりずつ支払いしたいと言い出したり)
トラブル対処は難しかったので、お店には必ず職員がボランティア
がついていた。

いつもは数人いるボランティアがたまたま僕ひとりだつたとき、
愛ちゃんがいつの間にか僕にぴつたりとくつっていた。
僕は腕に押し付けられたような形になつた愛ちゃんの胸のふくらみ
にドキッとした。

愛ちゃんはそんな僕を試すような目をして、ちらりと見た、ようこ
僕には思えた。

僕は慌て少し離れた。

それから僕は愛ちゃんとできるだけ一人きりにならなによつて気を
つけた。

みんなといふ時の愛ちゃんは、特に変わった様子はなく、
僕の勘ぐりすぎかと考えてしまつほどだった。
でもやはり杞憂ではなかつたのだ。

朝から土砂降りに近い雨だつた。

電車はのろのろ運転で、

いつもの倍近く時間がかかつた。

作業所までは駅からかなり歩く。

僕がびしょ濡れになつて、ようやく辿り着くと、

職員の梶山さんがモップで床を掃除していた。

梶山さんは僕の母親と同じぐらいの年の女性で、

三人いる常勤の職員のひとりだ。

せっかく綺麗になつた床を汚さないようと

僕はしつこいぐらいにマットで靴を拭いた。

「木場君は体調が悪くてお休みだつて」

梶山さんが、僕にタオルを手渡しながら、言つた。
その目がちょっと笑つてゐる。

同じ大学からボランティアに來てゐる木場は、
やる気がないわけではないのだが、
バリバリ働きます系ともいえな！

昨日もボランティア仲間でカラオケに行つて、

人一倍楽しそうに歌つていた。

「雨かよ、だりいなあ」という、
彼の声が聞こえた気がした。

職員は、梶山さんその他に渡辺さんという男の人人がいて、
力仕事や大工仕事を一気に引き受けている。

と言つても、定年すぎて久しいという年齢だから、
僕たちボランティアを何かとあてにしてゐる。
あまり喋らないけれど、気難しいのではなく、

ずっと仕事人間やつてきました！というタイプだ。
木場はうつとおしがるが、僕は嫌いではない。

もうひとりは香田さんという30代ぐらいの女人の人だ。
化粧気はなく、地味すぎる格好で、
いつも疲れた感じなのに、それでも底力のようなものは
感じさせる不思議なオトナだと僕は思っていた。

香田さんは、僕の通う大学の先輩らしく、

僕たちは香田さんの紹介で、この作業所で働いている。
大学ではボランティア活動が必修で、みんなどこかで
働いている。

保育園や老人ホームが人気だが、
僕は障害者支援センターを選んだ。

年の離れた弟が障害を持っているからかもしれない。

大人の障害者とはほとんど触れあつたことがなかつたので、
最初はかなり戸惑つた。

そろそろ半年が過ぎようとしている今でも、
うまく接することが出来ているのか、
自分でもよくわからない。

別棟でやっているパン作りで

怪我人が出たらしい。

パンを切る機械で指を落としてしまつたのだと、
梶山さんがオロオロしていた。

救急車が来て職員が数人同乗していつたので、
梶山さんと渡辺さんが、作業所の方に
応援に行くことになった。

代わりに予定より早い時間に、

愛ちゃんが喫茶の方にまわってきた。

事故を見て、動搖してしまったようで、こっちへ来た方がいいと判断されたのだ。

「今日はきっとお客様来ないとと思うから、大丈夫よね」

開店準備がほぼ整った時点で香田さんが言い出した。

警察にも行かなければいけなくなつたらしい。

香田さんは、この作業所全体の責任者なのだ。

僕と愛ちゃんは、「ひまわり」の中で一人つきりになってしまった。

午後になつて雨足は更に強くなつてきた。

いつもは田町たりのいい

「ひまわり」の中も薄暗く、

間接照明から蛍光灯に切り替えられていた。事故を田撃してしまつた愛ちゃんは、

まだ興奮している様子で、

青い顔で小刻みに震えている。

病院へ付き添つた職員から連絡がきた。

緊急手術が行われ、

縫合には成功したのだが、

今日は入院することになつたので、

しばらく付き添わなくてはならないといつ。

僕の方に用がなければ、

時間を延長して欲しいという事だつた。

僕はためらいながらも了承しそうを得なかつた。

香田さんの予想通り、

大雨の中では、お客様さんは誰も来なかつた。

「怪我しちゃつた大川さんの手術ね、

無事に終わつたんだつて」

愛ちゃんは少しふるんだ田で

僕を見上げた。

「良かつたね

「うん」

自分自身を落ち着けるよつこ、

小さく息を吐いて、

にっこり笑つた愛ちゃんが、

今までに見たことがないくらい

可愛かつた。

僕は思わず愛ちゃんを抱きよせた。

今日も綺麗に整えられた髪から、

いい匂いがした。

その後の僕の行動は、

魔がさしたとしか思えない。

もしかしたら、

愛ちゃんが僕に魔法をかけたのかかもしれない
とさえ、思つてゐる。

それほど、

自分で抑えきれない衝動が
突然襲つてきたのだ。

僕はあるついとか、

お店の入り口に鍵をかけた。

蛍光灯を消すと、

店は間接照明だけになつた。

愛ちゃんは僕の傍に寄り添い、

僕の行動をじつと見ていた。

僕は愛ちゃんと向き合つた。

愛ちゃんは状況が理解しきれない様子で、

少し首を傾げて僕を見た。

僕の目が怖かったのかもしれない。

少しあびえたよう、元々

顔をこわばらせた。

僕は今度は少し強引に、

愛ちゃんをぎゅっと抱きしめた。

身を堅くした。

もじこのまま愛ちゃんが、
拒否し続けてくれたら、
たぶん僕は気持ちを、
こみあげてくる衝動を
抑えられた気がする。
でも愛ちゃんは違った。
愛ちゃんの身体から、
すっと力が抜けていったのだ。

4（前書き）

少しオトナな表現があります。
ブンガクの範疇だと認識していますが、
嫌な人はスルーしてくださいね。

愛ちゃんは目を閉じて、顔を少し上に向けた。

僕は少しだけ、ほんの少しだけ迷った。

愛ちゃんに對して

好意以上の気持ちを持っていたかと問われたら、
うなづくことはできない。

そこには、愛情ではなく、
性的興奮にすぎない事は、
自分が一番分かっていた。

僕は呼吸を整えながら、

愛ちゃんをしつかりと抱き寄せた。

愛ちゃんは、されるがままに、
僕にピツタリとくっつく。

その顔はほんの子どものようでも、
成熟した女のようにあって、
僕の理性を失わせた。

僕は、愛ちゃんの淡いピンク色の唇に、
そつと自分の唇を重ねた。

愛ちゃんはいつの間にか目をつぶっている。
しっかりと結ばれていた唇は、
僕が舌先で軽くつつくと、
すっと受け入れてくれた。

それがあまりに自然だったので、
僕は少し驚いた。

初めてじゃないのかもしない、
僕は少し驚いた。

そう思ったのだ。

僕たちは脣を重ねたまま、客席の長椅子にござつと倒れこんだ。

しばらく僕と愛ちゃんは、お互いの体温に、ただ、戸惑っていた気がする。

愛ちゃんは、田をつぶつたままで、僕の次の行動を待っていた。

と、僕は勝手に解釈した。

僕は本当にすぐ迷いながらも、愛ちゃんの膝に手を伸ばした。

薄いブルーのフレアースカートは、まるで僕の指を誘うように、少し揺らめいた、そんな気がした。

僕の指はゆっくりと愛ちゃんの柔らかな太ももを這い、僕の意志を無視するかのように、いや、僕の意志どおりに、愛ちゃんの核心に辿り着く。

愛ちゃんはすっと田を閉じたまま、少しだけびくつと身体をよじらせた。

わたしは、恋をします。
男の人と、恋をします。

恋人です。

恋人は、かつこよくて、せが高いです。
わたしのことを、

愛ちゃんどよんぐれて、
うれしいです。

なぜかといふと、

おとうさんみたいだからです。

おとうさんは死んでしまったからです。
でも恋人は、

おとうさんみたいではないです。

おとうさんよりも

若いです。

かつこよくて、せが高いです。

恋は楽しいです。

なぜかといふと、

わくわくするからです。

恋人と会うと、ドキドキします。

なぜドキドキするかといふと、

とても大好きだからです。

好きな時には、

いっぱい会いたくなります。

毎日ずっと会いたくなります。

恋は、悲しいです。

なぜかとこゝと、

会えないと、やびしいからです。

わたしさ、やびしこはきらこです。

だから悲しいです。

恋はあつたかいです。

なぜかとこゝと、手をつなぐからです。
それからやめられると、

やめられると、

なきたくなります。

うれしいのになきたくなるのは、
ふしぃせいです。

恋はなみだが出来ます。

バイバイする時は、

いつもなみだが出来ます。

なかなかでねつて、

頭をなでてくれます。

だからうれしいです。

愛ちゃんのお母さんが差し出したノートには、

丁寧な字が並んでいました。

文章には、たどたどしさがあるものの、
漢字もたくさん使われていて、

愛ちゃんが一生懸命に書き綴る様子が
目に浮かぶようでした。

赤い表紙には、

「恋ひた」と書かれていました。

愛ちゃんの体調がおかしい事に

私が気付いたのは、夏の終りの頃でした。

こういう仕事に携わって、

かれこれ10年程になりますが、
決して珍しい事ではないのです。

病院では、

妊娠4ヶ月目に入つたぐらいだろうと
診断されました。

体調管理の一環としても、

女性の生理日は、

だいたい把握しているつもりでしたが、
愛ちゃんの場合は不順気味だったのと、
処理が自分できちんと出来るので、
注意が足らなかつたと反省しています。

妊娠週数が進んでいるということで、
犯人さがしは先送りにして、

愛ちゃんのお母さんに連絡をし、
来てもらう事になりました。

驚いてかけつけたお母さんは、
ご主人を亡くされてから、
九州にある実家に帰つていて、
体調を崩されていたこともあって、
愛ちゃんに会うのは、
数か月ぶりだったそうです。

お母さんはハンカチで田頭を押さえながら、
私にノートを渡し、

それからまっすぐに私の顔を見ました。
「産むというわけには、

いかないもんでしょうか？」

私は言葉に詰まってしまいました。

「私が一緒に育てますから」

お母さんは、決意のこもった田で、訴えかけきました。

もちろん私も愛ちゃんと話をしました。事の因果関係についても、かみくだいて説明しました。

愛ちゃんは私が思っていたよりもずっと、よく分っていました。

決してされるがままであったがゆえの結果ではなかつたのです。

もつと驚いたのは、お腹の中に赤ちゃんがいるという事に、愛ちゃんが気付いていたことです。まだ胎動がある時期ではないと思いつので、本能的なものなのでしょうか。

その時、愛ちゃんは

「赤ちゃんを産みたい」と言つて泣きだしました。

あつとお母さんと話した時にも、そういう展開になつたのでしょうか。

出来ることなら産ませてあげたいと私だつて思います。

愛ちゃんとはまだ1年とちょっとの付き合いでしも、作業所やホームで生活を共にし、母親のような気持ちも抱いていました。

ここに確かに在る命を
切り捨てる権利は、
誰にもないとも思います。
育まれた命が絶対に不幸せになるなどと
断定もできません。

本人と相手を呼び、
親と職員とで、

じっくりと時間をかけて
話し合ひべきことなのです。

でも愛ちゃんは、

どうしても相手の名前を言わないのです。
たぶん、口止めをされているのでしょう。
そこでお母さんが、
ノートを持ってきたといつわけです。

でも残念ながらノートには、
相手に結び付く記述は
見当たりませんでした。
お母さんの涙と決意に、
私が戸惑っていたちょうどその時に、
ドアがノックされました。

職員の梶山さんでした。

「香田さんに、どうしても今、
話したいことがあるつていうの」
梶山さんの後ろには、
ボランティアの青年が立っていました。

青い顔をして、

田を伏せています。

「ルルで？」

私は青年に聞きました。

青年はうつむいたまま黙っています。

梶山さんが青年の背中をぽんと叩いて

促すと、青年はよろよろと前に出ました。

それから顔をあげ、

応接室の中におひりと田をやつました。

それから歯をぎゅっと噛みしめ、

うるんだよつた田で私を見て、

小さくうなづきました。

私は愛ちゃんのお母さんと思わず顔を見合わせました。

その青年、中野大輔君は私の大学の後輩で、去年の秋ごろから、

ボランティアとして働いてくれています。細身で色白で、ナイスな印象ですが、誰とでも真摯に対峙する、

今時珍しいしつかりした青年だねと

職員の間では高く評価されていました。

促されるままに私の隣に腰をおろした中野君は、黙つてうなだれていきました。

「話してちょうだい」

私はなるべく穏やかに言いました。

「…僕…僕はその…」

絞り出すよつの声は、震えています。

「愛ちゃんのことだよね」

中野君は深くうなづきました。

短く切られた髪は黒々としています。

昨日はもう少し長くて、

確かに少し茶色がかっていたはずです。きっと染め直してきたのでしょうか。

「…どうしたら…いいんでしょつか?」

中野君は、困り果てた顔で、

おそるおそる私を見上げて、

それから愛ちゃんのお母さんに田をやりました。

愛ちゃんのお母さんは、中野君の顔をじっとみつめました。

「あなたが愛子の？」

中野君は少しだけ首をかしげて、
吐息をもらしました。

「本当は、よくわからないんです、

私と愛ちゃんのお母さんは、また顔を見合せました。

「一度だけなんです……それに」

「それに？」

言葉に詰まつた中野君に、私は少し焦れてくれました。

「……その……最後まで……あの……いかなかつたと
思うんです」

途切れ途切れに中野君は、その日の様子を話してくれました。
7月の始めごろ、作業中に入所者が指を切断してしまつ
事故があつた日のことです。

あの日は、作業所開設以来初めての大きな事故で、
職員が皆、あたふたしていました。

土砂降りの中、私は警察に出向いていました。
記憶がはつきりしませんが、
中野君の話によるとその間、
彼は愛ちゃんと喫茶に一人きりになつたようなのです。

そこで、そういう事になつてしまつたと、
いひこじました。

彼が嘘をついているように思えませんでした。
彼の言うことが本当だとすれば、

万が一、行為がなされていと仮定しても、
月数が合いません。

愛ちゃんが恋うたを綴るほどに

好きでたまらない「恋人」は、

中野君ではないと思われました。
でも、私は中野君にも反省を促さなくては
と思いました。

「責任取れる？」

私は心中を見透かされないよう気につけながら、
冷静な口調で、中野君に問いかかけました。
中野君は、またうつむいてしました。
自分ではないと思いながらも、
もしかしたらとこう気持ちもあって、
この場に来たのでしょう。

まだ20歳の大学生が、

私がつきつけた「責任」いう言葉の重みに、
たじろぐのも無理はありませんでした。
時計の音だけが大きく響いていました。
「愛ちゃんと、話がしたいんですけど」「
少し落ち着いたのか、決心をしたのか、
中野君は、また私に目を向けました。
「愛ちゃんはね…」

私の言葉を愛ちゃんのお母さんが遮りました。
「愛子は誰にも会いたくないって言つてるんだけど」
お母さんは、中野君の顔をじっと見て、
少し微笑みました。

「あなたの事、話してみるわね」

明日もう一度話をする約束をして、
中野君を帰しました。

何度も頭を下げながら部屋を後にする中野君に、
私は10年前に別れたある人を重ねていました。

その人は30を少し過ぎた、
ごく普通の営業マンでした。

出会ったのは私がまだ10代の頃。
大学に入る為に上京してきたばかりの
何も知らない田舎者だった私には、
彼の大入りたスタイルや言動が、
眩しいばかりでした。

そんな私を彼は本当はどう思っていたのか、
今となつては、
ただの目新しいおもちゃだったのだと
感じています。

彼に妻子がいるとわかつた時、
あまりの衝撃に泣きじゃくる私を、
彼はただ黙つて抱きしめました。

そして私の頭を撫ぜながら言つたのです。

「『いめんね』
世の中にこんなに残酷な『『いめんね』』が
あるということを、

その時に初めて知りました。

たぶん中野君も愛ちゃんに同じ台詞を聞いたのではないか、
私はそう思いました。
愛ちゃんはその「『いめんね』」が
きっと直観的にわかると思うのです。
やつぱりもう会わせてはいけない…
でも、愛ちゃんのお母さんの意見は違つたのです。

夢か現かはつわつしない世界の中で、ドアチャイムがしつこく鳴っている。

鳴っているからなんなんだ！

俺は現実をシャットダウンして、眠りの世界に戻ろうとした。

「もう！ 健ちゃん！」

隣に寝ていた里美が起き上がった、気がした。

「ひまわり作業所の香田さんだつて」里美が、俺の身体をバシバシ叩く。

「えっ？」

肌に感じる痛みと「香田さん」とこの前、俺の意識は、一気に覚醒した。

里美は眠そうに手を擦りながら、ベッドに倒れ込む。

「こんな時間にうざいくな？」

ベッドの上でバタバタしながらつめく里美を見て、俺の頭はフル回転を始めた。

お前、そんな格好で出たのかよ！

ベッドの脇に置かれたデジタル時計は、今、8時30分に切り替わったばかりだ。休みの日のこんな時間に、確かにうざいけど…なんで？

香田女史がうちを訪ねてくるなんて、今まで一度もなかったことだ。

俺は慌ててシャツをはおつ、

ジヤージのズボンを穿いた。

里美がケラケラ笑いながら、

ベッドの中についた俺のパンツを投げる。

「うつせーよ！寝てろ」

俺はパンツを拾つて里美の顔めがけて投げかえした。

「おとりこみ中だつたかしらっ？」

ドアを開けると香田女史が醒めた目を向けた。

この人は、いつもこうババくさい言葉を使う。

ひつつめた髪と今時見かけるのも珍しい瓶底眼鏡のせいで、

年よりもかなり老けて見えた。

里美が読んでいる少女漫画じゃないが、

コンタクトにしてちゃんと化粧をすれば、

結構見られる顔なのにもつたいない。

どっちにしても俺はこの手の女は苦手だ。

まあ、女と意識した事もないけどね。

「何か？」

俺はシャツの襟を整えながら営業用の声を出す。

香田さんはちらりと部屋の中に目をやつた。

「ちょっと出られないかしら？」

出たくないが、出られなくはない。

「いいですよ。支度してきます」

俺は慌てて奥へ入つた。

案の定、里美ガツチリ不機嫌な顔で待つていた。

とりあえず無視して着替える。

パンツも忘れずに…？パンツ、パンツ…里美がまた放り投げた。

「ノーパン男！朝から不倫男！さっさと消えろ」

布団をかぶつて丸まつた里美が可愛くなつた。

「ごめんな。すぐ帰るからわ」

返事はない。

「里美ちゃんあん？」

思い切り布団をまくりあげ、俺は里美を抱きしめた。

俺が本当に愛しているのはお前だけだ

駅前の喫茶店は微妙に混んでいた。

備たちは一人掛けの席は通され

益田さんから二ヶ月を一ヶ月間に亘る事もなく決まりた

あくまでテーブルチヤージだという意味だから……。最初はイチイチムカついていた香田女史の行動も、その意味合いが読めるようになつてくると納得出来たりする。

なんか俺も大人になつたよなあと、一ぐ一ぐ思ふ瞬間だ。

「……」いつ言い方は、本当はしたくないんだけど」「気づまりな長い沈黙の後、「コーヒーを一口飲んでから、香田女史が口を開いた。

「俺は何の話なのか まして見当も
俺はそんな気持ちを顔に出していくのだろ。」

「ちよつと噂を聞いたの……木場君がその……」セイジが口を開いた。

30

「はつきり言ってください」俺はイライラして少し声を荒げた。

香田女史はため息を漏らして俺の顔をしみじみと見る。
瓶底の用はどんな色をたたえていいのかよくわからない。

香田女史が途切れ途切れに話した内容は俺にとって身に覚えのないことばかりだった。

つまりは作業所の愛ちゃんが妊娠し、その犯人だと疑われているのだつた。

愛いちやんは確かに作業所のアイドルだが…

それはあくまでマスコット的なものであつて、

香田女史と同じく女と見た事はない。

そう言われてみれば、時々誘つような仕草をする事もあつた気がするが、

俺からすれば特に気になる事はなかつた。

俺ぐらい女に免疫があれば、ちょっとぐらいでは動じない。

こういう場合、純情な奴…例えば中野のようなタイプ…の方が始末が悪いのだ。

携帯電話が鳴つた。里美からだ。

俺は少し躊躇したが、なりやまないので仕方なく出た。

開口一番、ダミ声だ。

これはかなり怒っている。

出身は九州の熊本だ。

地元の高校を出て、東京に出たい一心で今の大大学に入った。
正直言つて、福祉に興味があつたわけじゃない。

経済的に浪人は出来ないから、

受かった学校に行くしかなくて、

滑り止めの滑り止めに、入学したに過ぎない。

とはいって、入学後に大好きな婆ちゃんが寝たきりになつたりがつて、

今では介護の資格を取るのもいいかなあと想い始めている。

根っからの勤勉家つてわけではないが、

勉強は嫌いでもない。

情報処理の専門学校に通う同い年の里美とは、
合コンで出会った。

その日のうちにホテルに行つて、
やることはやつたから、それまでの女かと思つたら、

なんとなくうまがあうといふか、もう一年になる。

頭の出来はイマイチだけど、顔は可愛い。

甘えん坊で我がままだけど、根は優しい。

一緒にいると癒される、まあ、そんな感じだ。

授業にバイト、ここ数か月はボランティアに出る回数も増えて、
驚異的な忙しさだった。

家に帰つて爆睡するばかりの日々に、
里美はぶつぶつ文句を言いながらも、
よく洗濯や掃除をしに来てくれていた。
昨日は久しぶりにバイトが休みだつたから、

映画を観て、居酒屋で食事をしながら軽く飲んで、ふたりで俺のアパートに帰ってきた。

それからは良く覚えていないが、たぶん何回戦かやって、疲れて寝てしまつたんだと思う。里美とは身体の相性もバツチリだから、こんな事はよくあることだ。

香田女史がやつてきたのは、そんな朝だから、いつものように余韻を楽しみたかった里美が怒るのも無理はない。

と思って電話に出たが、どうやら違ひじい。

今度はういちに中野がやつて来たといつ。

「何？このキモ男」

つて、おいおい、本人を前にそれはまずいだらう。まったく正直だなあ。

俺の困つた顔を見て、香田女史が小首を傾げた。

「中野君が来たみたいですね？」

「えつ？」

いつも能面のように表情のせいに香田女史の顔色が変わった。

8（後書き）

ここまで読んでいただきいた皆様、ありがとうございます。
主人公（視線）が変わりながら、進行していきますが、
読みにくくはないでしょうか？

この先、あと3人ぐらいの登場があります。
ご意見、ご感想をお待ちしています！

木場の家には、彼女と思われる女の子が居て、下着かと見間違うような格好のまま、玄関先に出てきた。僕を訝しげな顔で上から下まで眺めた後、おもむろに携帯を取り出した。

木場につながったのだろう、彼女の口から出た言葉は、「なんかキモイのが来てるんだけど」だった。本人を目の前にして、それは暴言としかいえない。彼女はおかまいなしで機嫌の悪い声で話し続け、「すぐに帰つてくるつて」と言い放ち、バタンとドアを閉めた。

僕が木場を訪ねたのは、少し前に彼と交した会話を思い出したからだ。

「付き合つてる彼女がいたとしてな」

作業所からの帰り道、木場は電車の中で突然に切り出した。夕方の車内は、まだそれほど混み合つてもいなくて、僕たちは並んで座っていた。

ああ、また自慢話が始まつたかと思いながらも、僕は黙つて耳を傾けた。

「例えば、まだ付き合つて半年とかつてレベルなのにな」

木場の表情はいつもより少しだけ真剣だった。

「妊娠したつて言われたら、どうする？」

「えつ？」

「例えばの話だよ

こんな僕にだつて付き合つていた女の子がいたこともあるし、豊富とはいえないまでも、そういう経験はなんどがある。

でも、だから男はずるいんだと言われただけで、ちゃんと避妊をすれば大丈夫だと確信していた。

妊娠の事なんか考えたこともなかつたのだ。

「それつて… 避妊してなかつたってこと?」

「知らねえよ」

木場は吐き捨てるように言つた。

例えばの世界を話すのは、難しい。

「出来ちゃつたら、産むかおろすしかないと思つ
僕は言葉を繋げた。

木場は眉間に皺を寄せて僕をにらむように見た。

「んなこと、わかつてゐよ

会話は「」で終わつた。僕に何を聞いても無駄だと思つたのだろう。それつきり木場は下を向いて、眠つたふりをしていた。

僕はどう答えたらいつかつたのかと、ひとりで悶々とした。

「逃げちやえよ」

かな?とも考えたけれど、学生の身でどこに逃げるところのだらう。
「俺じやねえよって言えば?」

かな?とも思つたが、DNA検査をしたら、
すぐに判明してしまつた。

「僕なら」

僕は口を開いた。木場は鬱陶しそうに顔を上げ、僕を見た。

「僕なら… 謝る… かな」

「はあ?」

木場が心から馬鹿にしたような声をあげた。

「あんな、世の中には『めんなさい』ですまねえ事が
いっぱいあんだよ」

「でも、今の状態で結婚して親父になるのが無理なら、
謝るしかないよ」

相手にならないといつよつた表情を浮かべたまま、木場は次の駅で降りた。

その時は、人に聞いておいて、そういう態度をとった事に腹がたつただけだが、愛ちゃんの話を聞いて、もしかしてと思った。もしかしてと思いたかったから、強引に思い出したのかもしれない。

それからうつと僕の頭の中では、

「逃げちゃえよ」「俺じゃねえよ」という声がこだましている。

同時に「自分がやつた事に向き合えよ」「お前だよ」という声も聞こえる。

だから僕は、真実を見つけなければならなかつた。たどり着いた先が、どうであつとも。

外階段の下で待っていると、

それほど時間をおかず、木場が息を切らして戻ってきた。苦しそうに身を屈めて息を整えてから、顔をあげる。

「一緒に来いよ」

香田さんと喫茶店にいたのだといふ。

なんで香田さんが木場のところに?

僕は香田さんの分厚いメガネの下から浴びせてくる視線を思い出して、身震いをした。

喫茶店までの5分ほど道を、黙つて歩いた。
僕はどう切り出したら良いのかわからず、
かといって、このまま香田さんと3人で話すのも
ためらわれた。

「ちょっと」

前を歩いていた木場が面倒くさそうに振り返った。

「先に話したい事があるんだけど」

木場はその場で足を止めて僕に向き合った。

「愛ちゃんの事だろ?」

やつぱり香田さんもその事で木場を訪ねたのか。

「俺は関係ねえから」

木場は動搖する様子もなく、いつもの調子で吐き捨てるよいつ
言つた。

「ここの前で、電車の中で…」

「あれは友達の話だつて言つたじゃねえかよ」

初めて聞いたが、僕はそれ以上何も言えなくなつた。

木場はまたくるじと向きを変え、歩き出した。

仕方なく僕もついていく。

「お前なんじやねえの?」

僕は慌てて木場の隣にまわる。

「なんで…」

声がひつくり返りそうになつた。

香田さんがそんな事を言つたのだらうか?

「なんてな」

木場は表情ひとつ変えずに、足を速めた。

「お前なんじやねえの?」は、僕が用意していた言葉だった。

木場なら、充分にありそつだから？

木場なら、こんな事態も軽くかわせそつだから？

自問自答してみても、答えは出ない。

木場と愛ちゃんが親しく話しているのを、僕は何度か見たことがある。

愛ちゃんが木場の冗談に大きな声でケラケラ笑い、

ぴつたりと身を寄せて、内緒話をしていた事もあった。

あんな事があつてからなんとなく愛ちゃんを避けていた僕は、

何も感じないフリをしながらも、

不思議な事に嫉妬のような感情を抱いていたのかもしれない。

自分に惚れているはずの愛ちゃんが、

木場に対してもそういう行動をとることが

許せなかつたのかもしれない。

どつちにしても、勝手な感情であることは自覚していた。

例えば愛ちゃんときちんと付き合つて結婚してなどという、

レールはまったく持つていなかつたのだから。

喫茶店の前で、木場は僕をちらつと見た。

情けないことには泣き出しそうな顔をしていたのだと思つ。

木場はふつと優しい笑みを浮かべて、

「大丈夫か？」と小さく訊ねた。

本当は逃げ出したかった。

香田さんは愛ちゃんのお母さんも交えて、昨日話したばかりだ。あの時の僕の曖昧な態度から、木場を訪ねた理由はすでに

お見通しなはずだ。

木場と一緒に香田さんと話しをするといつのは、

今の僕には拷問に近かつた。

木場は僕の背中をすつと押して、僕を店の中に入れた。

店は割と空いていて、奥の4人掛けにひとりで座っている香田さん

が

すぐに目に入った。

遠くからでもその目が、
気がして足がすくんだ。

すべて分かっているよと云つてゐるような

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5275d/>

恋うた

2010年10月8日11時59分発行